おつ免州又篇

二

口仁口
366
7

明治9
360
7

○回智名言味如何
普一切の妄念分別取捨憎愛悪見非等乃
心あることなれども智現前せざれば事一塵ばかれ
猿の物うらやむごとく清浄なる月光あるごとし
見と程集ハ私心をさしはさまず張ることなく成心を捨
不識心とは初心の時より智恵づくにて見ず学ばず
初心を来りし事を続ふたりひんと捨るなり
禅家にも妄量初発心乃全心を死却することを
たのめども一切のこころを捨ずしハ妄執の本智自

漸々規矩に照らし處なく又ぞれ而ふる
事一切境乃無心ふしく万像とてしく月の
無念にしく万物と照すがごとし聖人人欲ん
ご為よ脩よ體よ教をもふんた無私
無為ふ如をもつくしく智丸體ともたる照さざる所
なくしぐるる事ふしく智ふ用と名く強よ
此智乃體即ち是理渾然とふる所ふして
即ち仁乃體即ち是義乃體礼乃
體にしく仁義礼智丸體ともたる事一切ふ
如ふ周く吾主ふ名を要ふせもたる事ふ體
より發ふる念ふ名ふ人を海ふ抱とうまれ
ふ抱を海ひ人と成ふ而ふ仁と名付たる抱純
海ひ人とうすの念極て大小と分て區ふ
念ふ而ふしく義と名付たる抱ふ
しく吾ふ而ふ念を抱ふ而ふ
抱ふ而ふして而ふ而ふ
仁義礼智一體にしく

みはてもう智乃一字をまんじて而智をさつく
本智小憂るとそつく道と決さつく本智に憂
浮ともバ自然よ大悲乃んを救して一切衆
生まと洩度してお〻も漏すまし偽あるよ
もう仁の一字をまんじて仁乃聲よ和ん事我
要す仁の聲よいつり決まバ多心自ら
つゝまやく本智ひとり朗うなるとさまバ偽仏のおゝ
ん事ともうと決る而吾実ともまた実ハ一ツにて
十ともまた無き事なし仁の聲と智乃聲とうの
本一聲なるぶゆへよ本智にもとバ仁よ合ひ仁よ
もともバ多本智なりゆへよ遍教又ハ我邦の神
乃ともまた又ハそれにおうおまかせ
凡夫ハ私智と捨く本智ふもるとを初ぐ
もう私智ふ私智と狭く智とあるほどまふく
乃よ遠し堅人乃おを初るとの私智と
さまバ廣大の本智ふもりく確明者よ而信
回安楽自主なる貴べく尚ぶ色し
太本智よ和る乃ふ聲と徳

得してよりて遍照すまことが本智自ら顯
ありまた私の心體よりまた分明ならず識浮ざる
人いまだ二六時中一行を修せずして恵解を雲にして向
あらざるかよりて遣らすべからくべし
○問信ずる意味如何
答信ずるに實ありて偽りなきこの偽りたるに
赤を須とするに依りて夫ぬ形ち夫ぬまでの
偽るがゆえに拙を焼の切すべし自ら布とならく

みな仏をべ形ち水のごとく拙を淫すの濕
なれどもまことに夫乃夫ぬのあいまに實あるが故は
拙を焼拙を淫すその意なのほどもよく
拙を焼拙を潤すおよそ一切の男女
森羅万像一として皆信なるの形ち日月の
照し風雨の約のごとく山の若ち川のごとく
より揚に揚の花咲梅よ梅の實とむすび
菓の苦乃菓ぶ乃ごとくもいづまでも信なり
ぬるぢらん人をして同の拙と異ならしめ

ともを学ぶ輩の考え浅く吾乃味ひを知ん
者の為と意の両方をてらし次第に
信仰を信ずるがゆへよろかをとくと
によらず云々をよく約りを見
其実にして仏をあらわし其
を記してらお思するがゆへよ信を失わく
仏とうる左を経バ自然よ記る側隠のんを
其の仁ゟ根よ側隠乃仁をけとと世る共
学へと惨を人へおとつくふを絶す仏すは

仁の根なるとを仁のんさのへ仏りふしてを動
ゟるとがゝし義礼智の数も皆に準じてふべし
されバ信とく仁義礼智のみにあよ一把あるり
あらずたの仁義礼智仏よく云私ふてふ実
ゟる事を皆信ゟを独ふ右云私云依乃躰い
即ち是なく乃若にいへるおとく色ゟを程
渾然乃躰仏を仁義礼智信みも重へる
事なく兵是一躰仏りさわぐ仁義礼智信ゝ
のあるとを但是一性ゟるがゆへよ性乃名

二つの一元来道の本一つなるがゆえに一つに
ざるべからず水も於
能くこの如くして先ず仁義礼智を順
に解説をを今再び大略を記し挙
教とおぶ
一元気乃至仁も
事乃至にうるわしき義形色
儀よ慕じて和
識分かよ活ぜして自然
仁
仁義礼智信を絶して実なる信
義
河よ深くうごかざ
礼
なべてこの如き
智
もむものにづる

信
佐乃なるころみやまこそ
○問海語に食不厭精膾不厭細とあるも皆言
ふいれ飯とをなじくに米のまつげくるに厭
玉ぬと奥乃腸試なよくに細く切ると嫌へ
玉ぬといふ事は仕業ふまつ者ぐるが
味ひよく食して男の雲ひとつの杉も細き
味ひよく魚ともうさまバ飯生
げころがよく膾ハ細ごよくに皆と厭ぬと

作るを云いうる事にやたゞ厭の義うけ
ゐるくれ
昔不厭ハ猶魚うぐぬ～蓋聖人乃
心蘇飯悪食に安んじ居ふごと精乃飯細き
膾ハ為の雲ひふも互に旨味ひもよう希まバ皆も
魚うぐぬとのまふ皆ともふ我為年旧
うのうぐぬくうす
ひんばらうべうぐぬ玉ぬ事にうるも強バ負義ふんと
安んじ玉ぐ為をも我為の門の為宜けまだ
皆も魚うぐぬふくふんと分べーまさ

心と語合に安く和そて極老楽も気苞家問
乃為思うゝひが宮に歩にんを分べし是即
此活乃心よ合ふのこと我ひ彼よるぞゝへく
いそぐ安業ハ当来ことを不厭為命ハ不厭長寿
とてゝべしさまバ万事に付てもこと心を
ゝゝく幸也とて仏曽目前のみハを宜ふと
保ふうにすべしめやしふる一ばん考よ安楽うて
会るん為く為ことを嫌ふんるく自ら事富て
不義ふ私ち入事あるべし望ハ暇うく代ら食が
ら食の流労に忌絶しそ悪ることを
おにゐたるがめしき為の為ふく
道ハ人ら世話ふことを心のまゝに出来く宜けき
儀ふ扶夫あるゝ百世間話考ひてこと
本意のら食にくまべし百貫目に使ゝく心我
若ふ事ハふさがおゝえ来人ふ命にそて
犯生業辱する出ふく雑義にをんも
測ぐけまバ施出ん施ふんを安んで和ねばふら
ぬ事一たら佐施の施乃

座に出ていろ〳〵狂狐ぬのこるぞ手る安ん
して一生と過るべし若ふ座丸座ゟ安んじて
座の〳〵座に出し〳〵時狂狐ぬのこるぞ
事〳〵と憂へ〳〵失ひん事〳〵と憂へ〳〵一生苦てるふ
能〳〵考へふるべき事なり

○尚中庸に所謂素其位而行不願其外とい
事〳〵易〳〵と往よせ下さるべくい
若人と云ふのむさ時や語よ合へべし山言ひ
て淺ましきなどと能〳〵味ひ見ば深意ふ
あるべし〳〵碌ひ芝居と見物すふと横浜下様ぬ
別合追出ホの場所ありて半銭祥楽しく
見物するにいづまもふる凡夫ふまゞ
影ふ無楽ひふ花霧ふるふと云ふ只同上く
を見まざふひ〳〵按ふ銭ふひんよまゞバ我
ゟと摩ぎまく〳〵もいひ
洒ふの人ふぞう〳〵楽ふんと我ホもあのぬくにて
見物をべ十分の楽ふるんとこゞ方に心
出来く十分の楽を鬼ふまゞと共ふるこゝろ人と

豪心乃ん生くして見拍すまじ一日面白く往生
とみて劍を研ぎ鎗を磨き鉄砲を拵て仏に行ん拍子
をなく狩をなし紀伊國屋文左衛門なども家居衣服乃華麗
精美當時に冠たるべし美人を愛のみなんば
乃至を推して幻多此の如く大名高家を羨むべし佐久左衛門
豈君を見る人も自ら風丈なるべし此の中にく我こそ第一
なりと思ひ人も自ら風丈なるべし兵僧之を歎む
んまく漁よ豈君を樂よ恠ずん豈さよ如方ん

散乱して恠ず豈ま此の樂と知らんや且富貴も人を
豈我らと思ふべし不ま一乃至
ふるべし百倍勝もすべしや
を信而行不敢二
るべし佐久人と豈
実よ君の體と見拍
外と敢ざるふあらさわぎ紳を乱るの飯二蔬食一

飲水曲肱枕之樂亦在其中不義富且貴
於吾如浮雲とのむひ頽るの一簞食一瓢
飲在陋巷人不勝其憂回不改其樂とつゝ
めさるより放よ関るを其内重者外軽とつゝ
まん次ハ理乃ち用と紀じて色を正ふ程のめよあらずとつゝ
乃ち一拍として天理を楽紂も楽亦在其中不義富且貴
梅梅乃ち雖を蒸の花乃ち徹ることを皆同一を理の
ぬまく梅梅を奏うるを其の色も後うずと
楽紂も楽亦在其中不義富且貴
陶朱公が富を苑丹が貴を皆了程のぬ用をる
事といものひをる取をたのしてみを移ぶ
漢士乃ち馬徽が仰の事をぬくつゝがめく我
郷の業好が田季のを系を演くいづこの系をを
なおとつゝく讃嘆又月ハ限るく毛ハ塵を
のこゝろるものくあにに向りく月を高ひ雲こあ
く春乃ち約清もつゝぬをまくあるまにに降ふて
男女のろを倫よおろるとぶつふものう重で方
一うさとふひまを井を思ひ色り漢筆

が有ふもう〳〵を思ひそこぬといふて
がおそろ〳〵うろ〳〵廣巷ハ心活ようふ人ハ
又次よ佛ありハ人の無きなる事と説
く離ろと去ても欲念を除ろ人の徹脱成
事ハ大虚空の中よ一ツの微塵を吹ぶくく
人命の頁史なる事ハ轆轤の夕ごとう
窓の日ふ乾ろと墓ろ望漢士百條刀
天よろろと百まで寿命を持ら栄耀禁ざよ
病ろと又衰のぬく紅のぬく泡のぬく病の

ぬく又毫のおそ〳〵と紀ろくを分のうに安ん
じて世こ乃歓楽を結ぐぬさろハ又廣威
志川く世上の褐練浮夫よんを和さ毫子
無穆こに見へ人威会が有よ退
く毛を命なり威会が有よ北ずこのむひ孔
子の門人る路が公伯寮が徹言に毫し時孔子
毛を斎ろ命乃定教うるのと歎

ぜざる又そつくり心法を及べし但孔孟のかさい
てる命を脩して変動もて事とうしずこと
門人の為よのみ事なりとも法とも実
狂まことに恭さまバ老荘の書ふも毎よ命に
安んずる事能つひ仏教まも国縁終
法を差さく心を代多の教事に潜めバ中
庸素富貴行乎富貴素貧賤行乎貧賤
素夷狄行乎夷狄素患難行乎患難君
子無入而不自得焉のみべし

○閑事とん心との為かいん
苔心を捉ふ握て握ち出さう事為よ
属しく為ちまう為を即ち血関の
為に望他事をのくんふ封して八但事
血とくふさきの事といふ乱ず気血ち
変しく動そそくふ狂バ飯や汁
ち湯事のごがめしく飯や汁ハ血関ち湯気
そ事うう心を共ふとくバぐうしてお
ぐしよふんとてふぐめしく色ふに志気

帥とハいふべし志が先に立て気ハ志につゐて動
なり然バ拳の道よ学ぶとの件すがめしいやしくも何ぞ
無理とおもふ事あらバ是ハ無理也と知て
此人を悪む心のおこらバ知恵によりて志につゞく
目を怒らし顔を怖ろしうする事ハ気昇て面赤くなるなり
励しく罰するハ是血肉の気動きおこるからこそ
此所につゐて気なれば小人ハ小人の怒る迄
血気の怒りとはいふ是なれバ又君子の怒ハ義理の
怒とハいへり是君子ハ義理よりしてこそ人を責め罰て

人の為家の為天下の為に怒るべき時く
是を怒り逆らふをたまふされども肉心人を悪く
情を重ふせず仁心の余りにて一教をせしむる理を
知ひ迄ふるの事血気の動き逆ふる事ハなきと
いふなり是文王武王皆一たび怒りて天下の民を
安んずといふ所ぞ但怒りを為ふ時ハ顔色ニ
動ふも事気色を顕しまふ事もあるべし赫と
して表に怒るなどいふ是聖人とも内にハ
荒ふく動ざる也我身の如き者ども怒りざま

どもも丁寧懇ろなんどいふ時は必ず都合や都合
つきを加へて倦うんでも怖しい程よくもてなし
んいろ〳〵勤ざるのめり〳〵たのめく義理ある怒ハ
きの治く吾く知ぐ事を使ふ気志ハ事
止ざりする時里気知ぐ事を使ふ気志ハ事
乃師をする事之又元吏奥事乃怒りハ事ふ遂之
起りく知を事ますなよいまでさ事とをいひ
すまぐさるもとも〳〵して始ぐハ後悔さる気事
知を胃昧して事が
かし事が付く我るぐう怒りを静めくと
どもも一向勤ぐ〳〵時二時もるてく動るふり
気無ふに氣壹則動志といふ事之顛倒
して事を信を易るをよるとさわぐ知が事と使ハ
ん事ふにして事が知を使ふ人〳〵中庸よ序
に遍ねを主として人〳〵会と聴といふ事
ちう信怒里にかぐさず元七情皆ちう志
を拘よ集まとく流まて反事と知ぬハ皆
事が知を使ふ事ととくう練さへ

度と失ひ憂ふる時憂ふにも過合の時あり溺れ物とかくし思ふ事に會る者すべて諸此道ら有る又節するがい義なりと知りても心よ欲ひ切々何事も恐しき者は何事を知るとも膝が据ひ節悩む悪癖と志まども泣う悩み殊て止ずよ換然は天命と断めても推しきれざる紀ある是皆知らぬ者ども主と志る切がなきゆへ主乃躊して物の間に合ぬ故に道ふるに主と志る乃修行する是も知るべき主と

養ひ立るなり常に五義とすきずんの内人に能しきくおも耻る事なく職ようてかともさくまじ練然すれく必ず私ならして心の内すつぱりとして磨ぎすましたる鏡の如く常に操かしむ此ずらまば修行久うして主ある内から性に如く生れの悪みを除んでもおも頑固ならず仁義泰然たる至るべし是るを浩然と主と養ふての事ふかうなりされば主と養ふことは義と積むると此ふ是を集義乃丈夫ならは所行に操あらざれば此主

修せざりければ病掛して心乃動ぬ様よなるべし
たとへ浩然の気と云ハ浩然ハ正大流行の貌にて孟子
其爲氣也至大至剛と云へり是ハ天地のあひだに
塞るといふを我に私なく心堂々隔なければ此気
即ち天地の気也心即天地の心にして天地と我と無二
無別なりといふなり夫ゆゑに心と気との相離ざる義
を集て気と志の修りなきより扨此義を集の
外に気を志乃心乃今一條を即孟子牛山乃木
の章に夜気平旦の気と志といふ是ハ是義を
集乃助るものなり夜気平旦乃気とハ凡人
早に起て未人に接らず事に臨ず喜怒哀
楽の情未起らざる前なれバ只静にして
ゆるやかなる心此時ハ気も一向に静にしておのづと動ず
安らかに使なり此気を保持ときハ假令事に臨て
人に接して喜怒すべき時にも心気を持おほせ
て少しも動かぬなれバ気動ざれバ心自ら清明に
是ハ志の従に固く守る所なり是中庸に
戒慎於不睹恐懼於不聞といふ所と独の中

庸まよはもろ〳〵の生まれ出でくるよろこびを
ふくめる如く仏のもろ〳〵の衆生を教へ
みちびくをみるをもつてよろこびとなす
ゆゑに仏の衆生を教へ導くをみるを
もつてよろこびとなすといふ事あるを
ふまへてよろこびを恵ひの如くにたとへ
慧是珠とのべたまふ
波羅蜜ともいふ般若ともいふ
智恵あるを以て恵をおさめ
小さきをもつて大きをおさめ
分〻く人欲の癖をとりさるべし
○問菩薩の因位とは
いまだ仏果にいたらざる
菩薩といふ事に接して

とくふ事あるをもつて恵
ふするものを白檀よ如珠走盤定是盤
慧是珠とのべたまふ

にくこゝろふかたゞして袍の自然にもりてそこを等
まとゝ袒衣ハ衣袖を仕そふハそ人の長と身膊を
そくまよ合ふにに仕之以中を通ふ頭の大小
に周足袋を揃ふハ之乃短長ふ治ふがめー
世の法ふ猫ハ多ぐ動るとふがめくこと生指り
周くこゝと常す着禹王の洪水を治ふハ水の
自然にまひて約べきまへ事を唐千乃年と
剣ハ賢のつぐひ周周の会を周ふり切ゆ人双袍おと
接ぜざるぐめー是に周てゆよ素舞乃五常

ふ倫をこふく人とふ事ふも漢ふのふ風人
情よ周ーをふふ孔子又是にふく人を教
ふふ釋尊乃人伝を棄世るをいでく人を事
ふふも之去の七佛ふ棄ふふ棄ふふ
周くこゝと中興ーふふを乃人くふり孔子共
釋ー聖人乃通をふて集て大成ふふがめー
伝ふふふ乃周風人情に周るを共世
我朝の舎人親王の神通ふをふふ神代ふ
事ひにふく日本の風人情よ深ーふこと

して馬を使ぐがぬく成べし」めしうまバ我心を
労をぞして用うるべし但乞ハ拠り
なき事する不まくぎなどもせん
報にそ給くの妄心とおもへ虚ぬ自照乃定
未まくしていや心固の実ことに合い難うべし
固くこゝろ不敢ざる皆ち智邦係うべし先我よ
廣明無方大鞏をしてかうべ固乃用いぶ
してねがつくりかまへ

○問凡人情逆境ふ安なりまう時願ぬ成ぜるんハ何ぬ
答色香に所謂四十不動心といへる和尚て
貴み大雅事なり其ふに於く安んじ
得べき固の工夫大事ハ成就まく初るべし不嘗て
力を出ふ事久しく今其嘗て疲労せ
あまりと一く倍よ奉く初学の人の一助とせん

事を欺くの志ありて
一毫も潔白の事を書ひかく不」動ごとき
其いきほひ實に泰山の大勇に原けり夫大勇と
雖ども自反而不縮雖二褐寬博一吾
往矣と云へ千萬人吾に反見ること不義ならんや百万と雖ども
吾仁のぞ忍んや男子たるもの豈畏ひざること
此儀ふりて考ふるに孟子の大丈夫と
云ふ潔白の事と合ふ一孟子の心うを
更に見童仲舒の正誼明道の正其義而不」謀其利」
君子君子の心と書ふいふんこと学者皆
法とて以逆の境に處據をべし一時をでことさら
是非そいかく一孟子を制しごとくいふ教条
の心得成法ほ孫をり但當る而已ざいふ
道徳を求むる法を教ふ配生
實に當ホの外抱きんと動すに足ること
置を用重き者の外怪をいふ是をされバ

孔子ハ飯蔬食飲水樂在其中顏子ハ一簞食一瓢飲在陋巷不改其樂ト云ふ如くのみにてハ勤むべからず但一勤むるときハ必ず人の慮ひ及ばざる處ありて樂を覺ゆべし

一人の處ある時ハ衣食住の境よく世の執着を離れて大虛空ふ一もと吟ずるも善し山を望むも小さき大海よ一微塵と治まるも微塵と思ふも人の勝手次第毫も関ふるを遠にこの大乃

ものを結ぶべからず是が佛を帝王と極面するの壽を保ちて唯一場の夢ぞかしと觀ずるの心なり

一萬事皆一理の和ぬるを知ぶ若樂の境よ隙んぐ廣敬ひ心要ありたるべし然ざれバ萬里の外に旅をして翔するも皆僞よ生ぜん徒のまことを書せんや聖賢仏祖の意ハ

梅毒も鄙夫凡俗の玉石混なるを皆一法に
許可れば又この
醐醍の甘美も憔悴の者よく
玉樂の境界も一切の呪詛若未嘗我遊戯
三昧のごとくべし況人の仏祖にして老荘の徒
乃至と書よのへんもう彼司馬劭が仁の事域
もろもろなくといえども心ゆうに
ろうべき事に非ざるかの
一義事の皆てを救ふくして人力も及
ぶ所にあらざる事ともろもろ逆を除んぐく
免るべし一毫も胸の
がたなふ好らわく
なれ如ずとの
公伯寮といえるの
是命也
をも百の釋種猶瘡
皆世の周旋
百もへるて命

こうぐろまをせべ願例のごむようをべし

一我亦嘗て此男の二を捨るの戒経を聞り先身

を捨るとかや此男ようの妻属金銀財宝を捨て年ばかり

まぐ捨事能はざるなり人此男戒

輪廻をそこなうて諸の煩悩をこり種々苦を

とし男ようの妻属金銀財宝

一点の黒ひるく仏堂

うの事ともろもろの

も給ひ仁ふ合ひ商ふ治まりて下

を掌のごとく運ぶべしとも即佛教六度乃甲

布施の波羅蜜を修するを修

施を捨るおおあらば唯仏

ざるをを即家よ

そてめぐれの捨る事

宝ふるとも命

そうしかしんよおもふ捨

おしむ捨亡あるべ

なる所ふ成とも修一くまごふあらざる事

ふくおしむ為まじ

おこたらず兎即ち六度の中を持戒よあるてう
拇又仏を拝する心を見ん思ふよ是を見ん
此譬喩業摩をるみ実にしく勤めまこと
ぶり人小世と脱ろんとを脱ろん心是等ら法ま
ん法ら終実境よ周くし修する者て本実際ま一
事かし梅と使ずまバ中に津を生しこうふ
誉ことやバ是を怨ろうしされば時ろ乃
喜ハとろの喜ことなろうろんや憂ハ時るの楽ま
なりをまくたとへバ孔義の箇まのおろ紀念ろ

仏ふるまバ毒廉垂のんよ称ふバ猿りこぶ
唯対ふ仏ら及仏て宝ふる聲あるり
さまバひんと敬ちすて法の仁性を中ふ
こ事ふし一放よ人ら行め疾ろ毛と為急
云掛てもおも思ふるなく但是と利益せん
事とも一被釋尊の阿利ま弗ら害除まく
なくこ人ことを滅度せんろと指ふ
ばばこ一是即ち六度の中悉摩の被り

さくめしくおを開あるの如き見も
六度の中精進なるを信ぜしめ心動搖する
事なくまた即ち六度の中禪定に合せ
まぐうんの心動搖するはいえてその良智周う
ねまくも照さざるおるく拙よ遊じて利生拾拙の
開導するあるいまた即ち六度の中智恵に當ろ
さまざまん為の二ッとす捨なつまバ六度の約おのづら
そのうち中に籌ろう陰よ六度の約を中に籌はんへ
我儕仁義礼智を仁の性を中に含ふしてお」も
鉄る事明らめんと欲ぜんこと開いバ疾速の流よ降ぐく
こひ祈ぐくハ顛倒を興絡と免れん我嘗ぐ此ふ拾て
善を得ろうおよ人ら此ふ見と洋にするの徒里
一心靈の虚明るるまふ猶明境のあし境ハ方
物千差万別の影像をおもく悪ぐ所
るふして強も千差万別のおお朗うろう心一切
善悪のほんまよ於ろう法のくく一くろ分れべ
法を善悪法法のの朗うまふ事ふくく
照して境ハ差ぬとろ分れて

仏ハ善悪に拘ず放逸ならず万法を分別して六
道十界皆ここのうちに異ならざる事かし築紂盗
跖のごとき聖賢俳祖の流迄まぐ悪僧どもを
本覚小欲より一生を関渉る事なくさればこそ
おのれと一切善悪の法念にかゝはる事なく
おのれと善悪とをえらび又是を捨ず仕是と執ふかゝ
ぬやうにして物を同動なるべしと行住坐卧共に天
地の間を裏よく肯て我と我が自在なるべし

順逆の境界すべて我本来より具足と
悟ずる事あるべからず是禅なり
ゆえんなりて古聖俱
左をも是ありよく執ふの法ふして即我儒中和を
我のこまゝの中ハ即喜怒哀楽の未発なる
取すてゝ仏の本覚をよび和ハ即喜怒哀楽なり
節よ中取にうく即吾無の境をよび
る取ずり仏法と称営せんとするが唐乃
王摩詰の句ざ徒日行到水窮処坐看雲

起時みの裏の六尺の肉體左りさへ
時は吾魂の抜ん事を程る心通天地有形
外思入風雲變態中天地有形ない無の心體
那里風雲變態の中ハ所ち善悪の決ん事
平力と此よ思ふ久の能熟する事にて
通流まると特ずる変あるべ
一右ん嘆くいづもなうと一ほと受用
却ん赤ん遠流と特ずにふん物ども
靡ん主張ふ憂苦とんバカく

當經くとを一切根受定してゐく一刀截
まべ一気又果斷の決ハ通の悪ハ事て
うをバすべく人力の及ぶ事ふあらず
まと過く思惟すまバ実よ悪癌の如
大丈夫ん奮とこそ截ずるり
一ん心ぬくんと思惟にまとつまん
訣事ん能ハざる一大事にうべきハんと一時
く前の業くの二支を修ず却よ無念と
おうづくせ死したひにらく

分を果しゑめと元服して人な思人妻人と契るもとをおしもいとまなきあるべうもあらぬ
取ふう笑ずして煩悩負う現前すべし逢坂にて
なるべし凡人仏い越貳にしろく若過ぎし
改元ふうく安部する去うまじばなり
○同人多くいふ都事多く忙くしてうと立
更ふうの絶ず又つゝ我世事に関くくへ弥若う
変ぬくしてんを澄してん業ふうの絶人と

し言実ふ去事にしや但忙都中くと若ふ
中ふうの絶ずいふうにくいや去ふ弁
ふうく絶りのいうやふくいや
若し言去ふ人多く通と世
事とを以く別くの絶ふ思ひ世事と教く
んを澄弥く通の絶ふこつまふ世しを
ふうわくんと澄んと思ぐ気場の数まて
聖人のまふ小水ず世事ゞ所ちまふうこ
ふう世事を捨くふいづまの和ふ向く絶

約とるさんや堅ばり甫支無くて忙しくて時ハ
心物例するをみかけ世間さ物例のごとくて
心さうに帰するも紀元通の降約をかしうまバ
んめうふくて仰程忙しさ中おてを狼狽色てう
かし元心学家との子支に恥ずや又んよ叶無
事にうまて幸事さる時世幸事共私ん外ろ
受候ハうまく甘事に悔ると紀心安うふて
累なく事に應じて障ル元家と通の降
約ふにうばやそれ程の立ちさを脇立のんと
掛の憂慮するとさを憂患のおりのと除て
安事にうへまく事に應じて障ル元家と通の降
あるべさ差うくめや降約をび同おふ来るまの
世事以逆ちふ皆んと廣く研まうび
精神よ他山之石可以爲錯と以へるを元うり
若支亜と廣に同じうるをと廣合てハ
考へと変色うび時ハ山の把ろとうて収
元を廣く得べしさわざ人常に吾事にのさ
過ちふ心おまうち世ふに立ちをざうる

ものこ唯おく雑談ん死のゝふありてこゝもと
明ふ義を精く幸防も浅く日ごにすみ
大ひなる業とを成ひ賢人の湯ふこゝろべし
さまざまの品ふも人之有徳慧術智者常存「於疾
疾とゝ見ひり但し一通の時ひふ二つのひ
この世事に接るとさハ世事に疎く時ひとふ
次ら我事よて於く磨練すくゝふり又眠を
ちよハくと収く虚ひの談と釈ず是我都あり
おく談話すとゝさまバ世事に陸くもとく

時ひふるゝ〳〵といふの是世事に揚るとき談
ふ談話の妻とゝふり豈保ふあらべや
ふ世事に間隙あらべ勤坐なとして談話する
も心徳但静慮談話ふ事上磨練の功を
ふ豈強よ大ひなるとゝまる〳〵但小ふ釣ハりふも
世事就ひるゝ時よ於く八是ハ釣法ふ似
こゝ都〳〵く本の来所ふ帰くりもとゝん
ざるべんや

○岡田令ふ居く昨友ふ語よ仏をひふのして

修行おこたり勝なる勤しくはいかで乱心修
行いたす為ぞかし
昔儒者道を盛なる時には学者此所に於ては修
行怠りは事毎貴君に於ても古今の愚者皆
志ありと相見へけれど是ばかり故の気にて修行し
おほせには元有ぐるしき事にて能くは励なきゆへ
愚くん投修行の心へ心と観ずるより後の方便
あるまじく所安静にして志し怠ると記へ大の
怠る心は又怠るまへありぬ是矢張天理の妙用
の行ふ心なきまでに観じて此怠る心を安心し
んと思ひなして甚さ時は是彼ら起り修行
為なり天理の妙用の行ふ事と観じくさ苦さ
のんよあつしめ此修より着よ其事立時へし立ん心
是天理の妙用之と観じ居るときは、しや居る心是
天理の妙用なりと観じ此観じ観じしておも
為行なきんば我の行ひて気も本にまつろも安く
怠もなく事も無かるべしめ此すべき安楽
妙用の楽しみあるべし然るとも尚おこたり勝

なるべく服あると紀八傷寒書併出八角海螺名出其法依教訓奉ぜ後くる仏の衣くる又勧小産くを勝よ重く法紀ど亦ぬくと野をまつ紀く約くことを紀ぜべし約くんを紀ぶる甚よ終さ無くめくんがけく降りて沸にんの妻くふるとくなり当も儘をあと斎い家業を結くの止ぬ非ず此よもく降約の無き廣大服るもと知べし

れ紀んの方便くをまつ一念く唯天理乃妙用と妙用とんで独自約の奇妙るはくと紀とてなり当よさ止之妙用止ふみ字んく念く紀ず斎するくん当よ苦する時ハを人ぬ知ぐくり之をまり居くり転んだる人の修ぬ桃ぐ一こ皆ぬ紀ぶ止ふ人の修ぬ桃ぐ一こ皆ぬ紀ぶ止ふ約も風の吹も山の倖も皆ぬ紀ぶ止ふ

のく妙用之と紀じ其やう〳〵と歟と見るけそその
ごとく實の如たり枝の長くう葉乃ねうすう
も多の飛翥の走も皆是理の妙用之と紀じ
翥鳥と四つ足とく八寿命の長短も勿論の矣
萬も仕合の吉凶も生死も是又理の當然之事
と紀ずんバ有まじ扨其軍たり之吾ゝ躰
ゝ紀ゝとするを又八思案分別の流幻ゝも皆
是理のく妙用なるバいとゝ紀じ難ふして頑愚も
とんとずんバ有まじ扨世ふあらゆる萬人の吾ゝとするもの
悪人の悪とするも吾ゝとするもこれ理
の妙用なるバいとゝ吾ゝ其ふるこゝ其ものゝ
変ともふく仏書に虚妄の霊毒ゝて己も安く人を
安ーしふ惑もふく其を儒ゝも禅ゝ仏ゝ紀ふー
てもあるのハ抜矢なり又き人ゝう悪名を蒙れ
などするとも紀ゝ天理ふく妙用と計
ふくハ制ーごとゝ紀ハ天命之定数ゝいふ事
と紀ずべー定数たる運命ふく逃ぬ而と
いふも凡世ふ所ふもの事ーこのゝも皆理ゝ定

量劫より人の料簡を逃るゝ事なし
を捨て佛を圖諍と云傷ると死生有命富貴
在天と云事まさしく仰のごとく換すること能
すること仕合ふ事なり仕合ふ事なり皆天命
知らず安心してまつと云ふ事あるべし
うらぶれしなどいふ事無用なり
云ふ合ふ事なり扨たよつて思ふ
て理を執ずるにはんも安く勢もし
ふして先ハ君よの法度史を以執を作
ざる時ハ皆ちがの凡俗又ハ惣ての仏義の仏
など強くまもらやうにすべし
執とうせバ也ものゝ心を一度仏つきて太乃
法がめくなるべく執ず放の貢べし
○問云ん仏ハ佛ありと云ふ事
皆にかゝるべし教ハ傷ると
ふを云ふ礼皆況ものゝ心を飛ぬり
と教んと未熟の輩ず
ぬ仏のんわく可ならんや

着放心ハ心が外境に奪れて己と忘却する者なく
たとへバ芝居狂言を見てハ烟草火の膝に落るを
知らず芝居の看板に見入ルときハ巾着切に懐中
のものを取られても覺えざるがごとき是之を放心といふ
放心するときハ心根虚する故、浮草の波によりて、
東西に漂泊するがごとく酒色財欲に奪はれて去る
事をしらず故に心を失ひ身を喪するに至る人
とは木石のごとくする也獨にあらず心が外境にあるも
着せず亦身内にも住せず總て住着する所

なくして虚明自照する者之見るに目前の外境
にて悉く分明にして一毫も遺失せずしてしく
内実に湛然不動なり故に己を見付て又物を見入
ば心常に明靈にして昏晴せず静定にして躁
動せず元来心ハ着する所なきにあれバ躁にして昏
着する所なければ静にして明らか也故に其の
外を亡ば放心と物に着する者ハ無心ハ其物
に着せざる物に於ては心の着する所なくとも
懈怠して沈着すれバ又昏昧して無記となる也

是又放心乃執なり些とも惺々として昏沈ず
うごかず余念無心の道に合べし程傳に敬ハ收斂
不容一物之謂也といひ又敬ハ常惺々法也とも云是之
◯四 孟子に人之所不學而知者良知也といへり
明の王陽明先生ハ此良知の二字をいたく學
問の教とせり此良知を説て凡ての人をさとしや
言ん人の智一つも良ならずといふことなし是人の
性善なるゆへん也但し其良なるべくして悪するもの
あるハ心其實をしらずして妄なるによりて敵に出る事

中庸の注に誠の字を解して真實無妄といへり
心其實なるとは心乃性體のまゝにして明靈なる
時をいふ此時ハ心に些も昏沈雑念陰惑の
なく自然に明かにして物に應じて一々道理に
當るなり是を誠といふ心つよく動く
ことなく心に物を蓄ざれ攪に撓乱して塵ハ根たへ
離たる浮草の如く取る所なく不義不忠の
ことを為に至るハ其心の妄なるハ放心するに
よりて其心誠なるハ存心するによれバなり

ぐしゃうな
ざる無小さふ念くして森んして良勿
すべしあそ
ふく為を脩人と治らの堂に明べし弦ふ
んいかな真りて森の功を脩ず元人
こそんの徳を失ひて外拘ふ能ず
森んの仙をとりてそ
誠者天之道也
ざうの和之又誠之者人之道也
く聖人の徳よも

こうな良るまを論をはくつぐ唐人の
侍ふ青雨調入着無とふ白あうまを露とも
裏みて露をきみ遊ばるくこと平ふくく
ふまべおるものの
着がふ露ふよるくく服よあうも
○問仏都よ護森を楚とるふ人森の富の下と楚と実多ふる
なり物ふ護森と楚人の降魔の加速みる

よいん
善護摩を焚き我ん事の髪を焼却する
乃至我ん事を我ん髪と除し浄まば
外来の髪自ら清浄の如くうるえ来
護摩を焚くと雖も悪しく不浄なる
ごとくの業の如く成就せざる如く
現法にも護摩よく清浄なる仏菩薩
もその事を後悔せざるごとく
写経もまた如是

常此猶座く経巻を安置して
異ること無く看活親法して世尊と雖事
すること更らに二無し仏を定観し
菩薩衆を観ること仏の如くせよ
自然に滅除して悪習を
得ること疹や幸惜法要の如法と
賢人ども皆かくなり
吾作字時甚敬非欲学好是此學
持教のごと説ある人

作而為もとより勿論 政の治まるべし
能くこの道を行ふべきものなり 仁義又同く指教ふるところの人の
いふ所にうくる又これ如き治まるべしたとへば
水心器よく圓徹ぐるの人事くく教導して徹ることを
ねすまじ仁義を教導とねるのごとく
うのまう又うんよ徹ぐる人事よく教導ちることを紀ハ
ずよ聖賢のんよ等かるべし元来周公の精粗は
周里佛教の智言を看話公唱呪偏修書写あ
の周公の精粗をまることをみるべし

○問 漢土に司馬徽と云人ハ何事を皆好く
やいうまゝうち或時人来りてのことを
語るに司馬徽ことを指て同人ハ未だ深くうち
その人物を知らざるの事を答ふ其人大ひ
好といふ所ある事なりや司馬徽ずて没ぐ言
言も又大ひよきといふ道理ある事なりや
言いふ所も道理あるべし

或ハ起シ或ハ業ヲ休ミ裏ヘ或ハ通或ハ居
あるひハ臥ころ〻一種自然の妙用ありて毫も人の
作為ヨリ勝ル皆かゝるなり叶ぬ事をあらせ
ぬく一ツ皆天然の理にしたがふ而已
行のもよろしからぬ極の言ハ云ハ
水澤鶴の睛長ク鳧ノ短キ是ヲ切バ哀ん鳧の短ク鶴
けまじものそくと續ハ憂んやつくがめく鶴の脚の
ものを天然の理にしたがふ而已
乃理之差鳧の長キ短キ鶴ヨリ着鶴の脚を鳧に着は

双のとりかふ不便利なるべし一ツを切バ両ツを皆一ツ
のぬ用かふく天然の理あるゆへ云ハ
をもとバ人ヨリ取ふく不勝手あまたを理ヨリ
おもき理なり行のもよろしからぬ安んじ更ふくいとの嬰ル
ふべからず然ル
して当ヨリ安然ヨリ取捨更ル場の私なく
皆濁ヨリ天理ヨリ直ニ行のくるしみかし
とくへハ事ニしかゝるべし但老荘の
乃流なり故ヨリ生ル弁ニおよく

只一種の妙用我たのしむ
ところ又人もまた都人及んぢ事を歌ふゆゑ毎
人よ笑ひてぬくといふの記したる
と処んぐこぞるがゆゑ
つく気と喩せりまた
婦人の性情のもろ
汝が云ふ又大ひふ好
ものをとろべし
若いこの生く
人ともふ笑ひしまも
おのづから生を
く者といふこの情
海よ気もちの人情
ぎつく一種よ妻ずる中
をもバ天然よ違し生
して迄ま舟ふしてん
気学よ者のんねるをもち
る人よ對しく大ひ

心を勇んで為すまじ即ち自然の仁ならざるなり
ちまじ為すべくそこに種ふまじくそこに仁
心なのごとくそこに是仁智兼全本来相
添の道理のごとく但為すまじの及ばざるを
人ゝ及して人我添ふ為ふいろくハ
及ざる所ふいろくハを楽んで能ざるハ
ゝを知ふ里天を知人と知べし時切金る
ゞ